

精神臨床看護論演習におけるコラージュ療法の活用 －学生の自己理解・他者理解の促進をめざして－

白石裕子*, 則包和也¹⁾

¹⁾ 香川県立医療短期大学看護学科

Utilization of Collage Therapy in Clinical Psychiatric Nursing Practice － With Aim of Promotion of Self-awareness and Others Understanding of Student －

Yuko Shiraishi*, Kazuya Norikane¹⁾

¹⁾ *Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

Abstract

The collage therapy practice was carried out for nursing class of second grade under the clinical psychiatric nursing practice in order to study “self-awareness and others understanding”. As collage practice I, the self was imaged in the theme of “I”.

Next as collage practice II, the image from the others was made up in the theme of “I from the viewpoint of the others”. Forty-four reports were obtained from 45 students of the collage therapy practice. They were analyzed along the flow of the practice process in order to clarify the learning process of self-awareness and others understanding. Those reports were analyzed with the content analysis of Berelson. As the result, in practice I, four higher rank categories and 16 lower rank categories were obtained. In practice II, three higher rank categories and 16 lower rank categories were obtained. Through the collage practice, it is possible to obtain the motivation of the self-awareness by discovering potential self and ideal self. Then, by considering the image from the others, many feelings attention reactions were caused and seemed to achieve self-awareness and the others understandings.

Key Words : コラージュ療法 (Collage Therapy), イメージ (image),
自己理解 (self-awareness), 他者理解 (others understanding)

*連絡先 : 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護学科

*Corresponding address : Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0123, Japan

はじめに

精神看護学は、平成2年以前は「成人疾患と看護」という領域の中の「精神科疾患と看護」という1科目として明記されていた。その後、独立した領域としての位置付けを求められていたにも関わらず、平成2年の改正においても科目名さえも指定規則の中で位置付けられず、学校の自由裁量科目となった。しかし、精神保健及び精神障害者を取り巻く社会環境の変化によるニーズの高まりから、平成9年に実施された看護基礎教育カリキュラムの改正では、独立した専門分野として新設された。それに伴い、従来の精神疾患患者への看護のみならず、あらゆるライフサイクルの心の健康についても広く学ぶことになった。香川県立医療短期大学は1999年(平成11年)に新設された短期大学であり、新カリキュラムに従い、精神看護学は「精神看護学概論」、「精神保健論」、「精神臨床看護論」、「精神看護学特論」、「精神看護学実習」の5科目で構成されている。新しい領域であるために、筆者らは精神看護学担当教員として、講義内容、演習内容をより充実したものとするために試行錯誤し、その評価及び検討を行なっている。そうした中で、看護の対象をより深く理解するには、まず自己を知ることが不可欠であるとし、精神看護学の目標の一つとして「自己理解・他者理解」を挙げた。それを達成するための一つの方法として精神臨床看護論演習でコラージュ療法を導入した講義・演習を行った。コラージュ療法は心理療法の一つとして近年様々な実践・研究が行われており、クライアントの自己表出、カタルシスなどが効果として挙げられる。今回、学生のコラージュ療法演習後にレポートを課し、本講義・演習のねらいとした「自己理解・他者理解」への達成度を明らかにする目的でレポートの内容分析を行なった。記述内容から「自己理解・他者理解」の学習過程に相当するデータを抽出し検討を加えた。

【コラージュ療法】

コラージュ(collage)とは、もともとは“coller”というフランス語から由来する言葉で「のりで貼る」という意味がある。写真や絵や文字などを、新聞、雑誌などから切り抜き、これを画用紙やケント紙などに貼って一つの作品にするもので、20世紀初頭に生まれた美術の表現である。わが国における心理療法としての導入は、1987年に森谷、杉浦¹⁾が芸術療法の一技法として用いたことから始まった。その後、児童相談所、教育相談所、心療内科、小児科な

どで普及している技法である。方法には大きく分けて、あらかじめ治療者側で用意した雑誌、新聞、広告、カタログなどを好きに切りぬいて貼るマガジン・ピクチャー・コラージュ法と、あらかじめ治療者が切り抜いたものを箱に入れ、その中からクライアントが選んで貼るコラージュ・ボックス法の2種類がある。看護教育におけるコラージュ療法活用としては、佐藤²⁾が、看護学生が自己理解・他者との関係性のとり方についての振り返りのきっかけ作りになったと報告している。

講義の概要

1. 本講義の位置付け

当短期大学では精神看護学の講義内容として、1学年前期「精神保健論」(15時間:1単位)、後期「精神看護学概論」(15時間:1単位)、2学年通年の「精神臨床看護論」(75時間:2単位)、3学年前期の「精神看護学特論」(15時間:1単位)、通年の「精神看護学実習」(90時間:2単位)で構成され、常勤講師2名、非常勤講師1名、助手1名で担当している。今回のコラージュ療法を用いた講義は2学年通年の「精神臨床看護論」における講義・演習の内、2時限(180分)を用いて行った。

2. 本講義のねらい

課題Ⅰでは、自分をイメージで表現することから、自己認識へのきっかけとなることをねらいとした。

課題Ⅱでは、他者をイメージとしてとらえること、自分の自己イメージと他者からの自己イメージの相違点を認識することを通して、「自己理解・他者理解」の促進を図ることをねらいとした。

3. 本講義の実際

講義の目的を「コラージュを実際に行い、実施方法を学び、かつ自己理解、他者理解を促す」と設定し、4~5人のグループ編成を行い以下のような課題に沿って演習を行った。

課題Ⅰ.“私”というテーマでコラージュを行う。

【B4用紙を使用し、マガジンプクチャー法で行う】

① 私らしいもの、好きなもの、気になるもの(写真、絵、文字等何でも可)を選んで、切り取っていく。

② 切り取った切片をB4用紙に自由にレイアウトし、貼りつけていく。

研究方法

1. 調査対象と調査内容

調査対象は香川県立医療短期大学看護学科2年生45名で、調査内容は課題Ⅲで提出されたレポートの記述内容44件。

2. 研究期間

2001年4月～2001年11月

3. 分析方法

レポートの記述内容を研究者2名で精読し、Berelson³⁾の手法に従い、内容分析を行った。記録単位は1内容を1分析単位とし、内容の類似性に基づいて分類を行い適切と思われる下位カテゴリーを抽出した。さらにそれらの下位カテゴリーに検討を加え、上位カテゴリーを命名した。

4. 倫理的配慮

記述内容はコンピューター入力し、それぞれを記号化することで、匿名性を保持した。さらに、コラージュ作品の写真撮影及び論文への転載については、当該学生に口頭で承諾を得た。

結果

45名の学生から44件の自由記述を得た（レポート未提出1名）。

1. 課題Ⅰの下位カテゴリーの抽出

課題Ⅰのレポートから、40のデータが得られた。その中から、〈イメージ選択の困難性〉、〈イメージ選択範囲の限定性〉、〈イメージ表現の簡易性と遊戯性〉、〈イメージ表現過程での忘我性〉、〈作品完成時の満足感〉、〈自己イメージへの不安〉、〈自己イメージ言語化の困難性〉、〈自己イメージとの一致感〉、〈完成作品への愛着〉、〈自己理解不全の認識〉、〈理想的自己イメージの認識〉、〈潜在的自己イメージの認識〉、〈イメージでの自己再認識〉、〈他者作品への興味〉、〈他の絵画療法への興味〉、〈コラージュ療法の有効性の認識〉の16個の下位カテゴリーが抽出された。

2. 課題Ⅰの上位カテゴリーの命名

〈イメージ選択の困難性〉、〈イメージ選択範囲の限定性〉、〈イメージ表現の簡易性と遊戯性〉、〈イメージ表現過程での忘我性〉、〈作品完成時の満足感〉の下位カテゴリーから《イメージを用いた自己表現作業に関連した反応》、〈自己イメージへの不安〉、〈自己イメージ言語化の困難性〉、〈自己イメージとの一致感〉、〈完成作品への愛着〉



写真1 課題Ⅰのコラージュ例



写真2 課題Ⅱのコラージュ例

③ できた作品を各グループ員で鑑賞する。

④ 各グループ員に自分らしさのポイント（どうしてこれを選んだのか）を説明する。

課題Ⅰのコラージュ例（写真1）

課題Ⅱ.“他者から見た私”をコラージュしていく。

【B4用紙を使用し、マガジンプクチャー法で行う】

① 各グループ員は、それぞれのグループ員に“その人らしい”ものを1枚ずつ切り抜いてプレゼントする。

② もらった切片を自由にレイアウトし、用紙に貼りつけていく。その際気に入らないもの、自分らしくないと思ったものは紙の裏側に貼って行く。

③ できた作品を各グループ員で鑑賞する。

課題Ⅱのコラージュ例（写真2）

課題Ⅲ. 課題Ⅰ・Ⅱの感想を自由記述でレポートに書く。

から《作品を通した自己客観化の過程》、〈自己理解不全の認識〉、〈理想的自己イメージの認識〉、〈潜在的自己イメージの認識〉、〈イメージでの自己再認識〉から《自己認識へのきっかけ》、〈他者作品への興味〉、〈他の絵画療法への興味〉、〈コラージュ療法の有効性の認識〉から《コラージュ療法及び他の療法への興味の拡大》の4個の上位カテゴリーをそれぞれ命名した。分析単位のデータ数は、《イメージを用いた自己表現作業に関連した反応》が11、《作品を通した自己客観化の過程》が10、《自己認識へのきっかけ》が13、《コラージュ療法及び他の療法への興味の拡大》が6であった(表1)。

3. 課題IIの下位カテゴリーの抽出

課題IIのレポートから60のデータが得られた。その中から、〈イメージの差異への驚き〉、〈イメージの差異への不安〉、〈イメージの差異への喜び〉、〈イメージの一致への驚き〉、〈イメージの一致への喜び〉、〈イメージに対する理解不能〉、〈イメージ一致の認知〉、〈関係性によるイメージの差異の認知〉、〈他覚的自己イメージの認知〉、〈行動や意識変容の促進〉、〈他者への興味関心の拡大〉、〈イメージのやり取りの楽しさ〉、〈イメージ表現の困難性〉、〈イメージ表現の表面性〉、〈イメージ表現の簡易性〉、〈イメージ選択範囲の限定性〉の16個の下位カテゴリーが抽出された。

4. 課題IIの上位カテゴリーの命名

〈イメージの差異への驚き〉、〈イメージの差異

への不安〉、〈イメージの差異への喜び〉、〈イメージの一致への驚き〉、〈イメージの一致への喜び〉から《他者の自己イメージへの情意的反応》、〈イメージに対する理解不能〉、〈イメージ一致の認知〉、〈関係性によるイメージの差異の認知〉、〈他覚的自己イメージの認知〉、〈行動や意識変容の促進〉から《他者の自己イメージへの認知的反応》、〈他者への興味関心の拡大〉、〈イメージのやり取りの楽しさ〉、〈イメージ表現の困難性〉、〈イメージ表現の表面性〉、〈イメージ表現の簡易性〉、〈イメージ選択範囲の限定性〉から《他者とのイメージ授受についての感想》のそれぞれ3個の上位カテゴリーが命名された。分析単位のデータ数は、《他者の自己イメージへの情意的反応》が16、《他者の自己イメージへの認知的反応》が32、《他者とのイメージ授受についての感想》が12であった(表2)。

5. 学習過程の図式化

課題I, 課題IIの上位カテゴリー、下位カテゴリーを用いて各々の学習課程として図式化を行った(図1)(図2)。

考 察

今回、精神臨床看護論演習として、45名の学生がコラージュ療法を実際に体験し、その感想を44名の学生から得ることができた。課題Iでは、自分のイメージをコラージュしていったが、学生は、《イメ

表1 課題Iに対する意見の内容分析

上位カテゴリー	下位カテゴリー(データ数)	記述例	記述数(%)
イメージを用いた自己表現作業に関連した反応	イメージ選択の困難性(2)	雑誌からは自分らしいイメージを選びにくかった いろんな雑誌から、自分のイメージとなるものを切り抜くというのはむずかしい	11(27.5)
	イメージ選択範囲の限定性(3)	雑誌の種類が少なく、ぴったりしたイメージを見つけるのが大変だった 限られた本の中で自分を表現するイメージは探せない	
	イメージ表現の簡易性と遊戯性(3)	自分の気持ちを言葉ではなく写真を使って表すので抵抗なく楽しくできた事が良かった 雑誌の切れ端で自分を表現する事は楽しかった	
	イメージ表現過程での忘我性(2)	童心に戻ったようなひとときがすごくて楽しかった コラージュ療法で雑誌を切り抜くことに夢中になった	
	作品完成時の満足感(1)	コラージュ作品を作り上げたとき、感激と満足を味わった	
作品を通した自己客観化の過程	自己イメージへの不安(3)	自分にはこれといったイメージがないのかと不安になった コラージュで自分をはっきりと表現できなかったことがつらく、不安になった	10(25.0)
	自己イメージ言語化の困難性(4)	自分の作品の何処が自分らしいのか説明に困り、上手く表現できなかった 好きなように貼っていたので分析してもまいちわからない	
	自己イメージとの一致感(1)	コラージュを実際に行なってみると思っていたより結構あっていた	
	完成作品への愛着(2)	自分の作品が気に入った 自分の作品をあつめて返して欲しい(気に入った)	
自己認識へのきっかけ	自己理解不全の認識(2)	私はまだ自分自身をよく理解できていないと感じた 自分の大雑把な性格を表している事が判り自分を理解していないと思った	13(32.5)
	理想的自己イメージの認識(5)	自分のこうありたいという理想が切り取った色に出ているのではないか 現在の自分だけではなく将来こうありたいという希望も少し入っていたと思う	
	潜在的自己イメージの認識(3)	自分の気づかない潜在的な部分が見えて面白かった 自分を現実的に表現する事で意識していなかった自分が出てきているように感じた	
	イメージでの自己再認識(3)	飾らない自然体の自分でいたいという気持ちが強く現れていた 選ぶイメージの色で、自然に自分らしさが出る事を実感した	
コラージュ療法及び他の療法への興味の拡大	他者作品への興味(2)	今回見た以外の作品も見てみたい コラージュ演習では、みんなの個性が現れていて面白かった	6(15.0)
	他の絵画療法への興味(1)	絵画療法などもやってみよう	
	コラージュ療法の有効性の認識(3)	時間がたつてもう一度コラージュをすると新たな発見ができるのではないか コラージュ演習で活発な意見交換ができコミュニケーションが深まったので臨床で応用すると良い	
合計			40

表2 課題IIに対する意見の内容分析

上位カテゴリー	下位カテゴリー (データ数)	記述例	記述数(%)
他者の自己イメージへの情意的反応	イメージの差異への驚き(3)	他者からのイメージと自己イメージが全然ちがうことに驚いた 自分の作品と比べると他者からのイメージとの差異に驚いた	16(26.7)
	イメージの差異への不安(2)	自分のある部分はわかってもらえたいが二面性があるような気がして不安 たれパンダ(自己イメージと違う)をくれたので私は二重人格なのではと不安になった	
	イメージの差異への喜び(4)	「私のイメージが他人と自分とで全然違ひ驚いたが良いイメージなので嬉しかった 他者からのイメージは(明るい色だったので)嬉しかった	
	イメージ一致への驚き(3)	密かに収めているはずの内面が他者からしめされ驚いた 思っていたよりイメージが驚くショックを受けたが当たっていてビックリした	
	イメージ一致への喜び(4)	他者からの自己イメージがほぼ同じだったので嬉しかった 他者からのイメージで違ったり嫌なものはなく嬉しかった	
他者の自己イメージへの認知的反応	イメージに対する理解不能(2)	他者からもらったイメージが意味不明という事は、くれた相手の事を私も理解していないということか？ 全く理解できないイメージ(ブルドッグの頭に載ったフルーツ)をもらった	32(53.3)
	イメージ一致の認知(6)	私の自分のイメージと他者からのイメージはそんなにずれていなかった 他者の抱くイメージとしては、面白いというイメージで自分に合っていると思った	
	関係性によるイメージの差異の認知(2)	親密な友達からは、自分と同じようなイメージをもらった 自分自身で強く感じていなかったイメージをもらい、私の扱われ方は人によって違うと感じた	
	他覚的自己イメージの認知(19)	これが他者から見た私らしさなのだろうかと考えさせられた こんな風に見られているんだと参考になった	
	行動や意識変容の促進(3)	自分の接し方や人間関係を見直す機会となった 他人から客観的に見てもらうことより新しい自分が発見できるかもしれない	
他者とのイメージ授受についての感想	他者への興味関心の拡大(2)	グループで行う事で他の学生がどう言う事を考えたり、どう言う事に興味をもっているのかを知る事ができた 芸術療法で人が抱くイメージが様々なものだとかわかったり人の内面を知れて興味深かった	12(20.0)
	イメージのやり取りの楽しさ(3)	他人が持つ自分のイメージを觀賞として知ることができるとは楽しかった 他者のことを考えてイメージを探す事が楽しかった	
	イメージ表現の困難性(2)	他者のことを考えてイメージを探す事が難しかった 相手にぴったりくる切抜きが見つからず少し難しかった	
	イメージ表現の表面性(3)	他者が抱くイメージは表面的なものだけだった 他者からのイメージは内面的なものではなく、ほとんど外見的なものであった	
	イメージ表現の簡易性(1)	他者のイメージ(本人が気にしている事)をコラージュならうまく表現できた	
	イメージ選択範囲の限定性(1)	全く違う種類の雑誌を取り入れると自分と他人のイメージの差がもっとわかるのではないかと	
合計			60

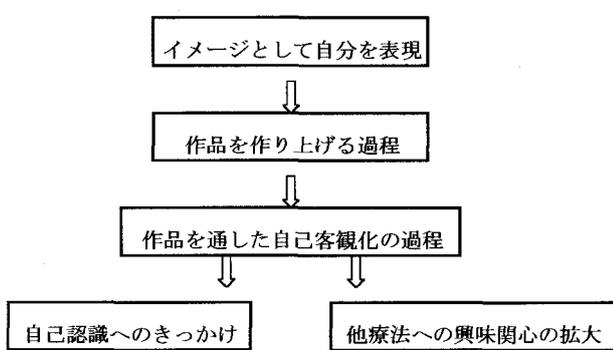


図1 課題Iの学習過程の図式

イメージを用いた自己表現作業に関連した反応》として、「自分の気持ちを言葉ではなく写真を使って表わすので抵抗なく楽しくできた事がよかった」など、イメージで自分を表現することが楽しい、表現しやすいなどの感想を挙げた者と、「雑誌からは自分らしいイメージを選びにくかった」など、イメージで自分を表現することや自己イメージを選択することを困難と感じたものがほぼ同数であった。ここでイメージの定義として「人々が特定の対象や事象、または概念について抱える漠然とした過去から現在にわたる経験や印象の全体像であり、視覚的なものに限らず、五感それぞれに、またはそれらの統合されたものとして存在する同様のものをいい、言語よりも求めているものを純粋に発現させようとするものである」を用いると、学生は、学校教育のなかで言語や文章で自己を表現することは学習してきている

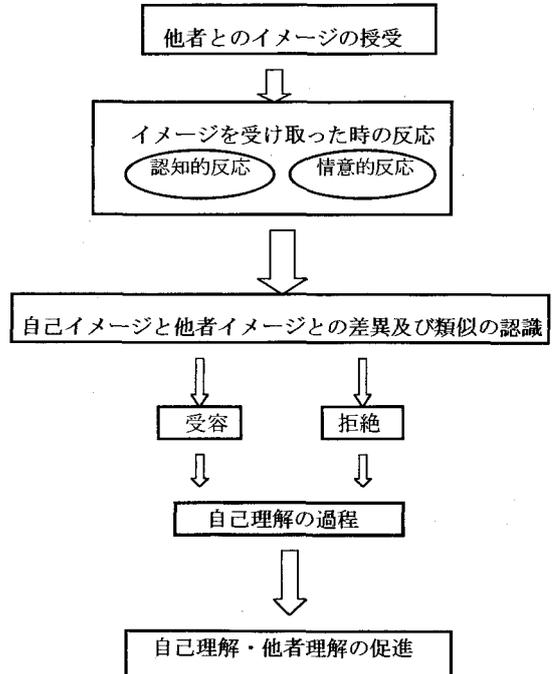


図2 課題IIの学習過程の図式

が、イメージで表現するという機会が少なく戸惑いもあったと考えられる。しかし、制作過程で「童心に返ったようなひとときがすごくて楽しかった」や「雑誌を切り抜くことに夢中になった」などの感想もあり、芸術療法のカタルシス効果が体験されたものと考えられる。《作品を通した自己客観化の過程》の中では、「コラージュを実際に行ってみると思っていたより結構当たっていた」と感じたものよ

りも、「自分にはこれといったイメージがないのかと不安になった」、「自分の作品の何処が自分らしいのか説明に困り、上手く表現できなかつた」など、作品に直面した際の自己イメージへの不安感やイメージ化した自己を言語化することの困難さを感じたものが多かった。今回の学生の年齢は20歳前後であり、この時期はエリクソンの発達課題では「自我同一性の獲得」の時期であるといわれている。そのため、学生はいまだ自己のイメージが明確でなく、自己のイメージを選択することが困難であり、選択したものについてもその根拠がうまく説明できないことが推測される。

《自己認識へのきっかけ》に関する記述数は課題Ⅰの上位カテゴリーの中で一番多かった。学生は、自己のイメージと直面することで自分の作品の中に自分の未熟さ、理想、潜在的な自己を見出し、自己を再認識するきっかけとなったと感じていた。このことは、文字や言語を用いるよりもイメージを用いることで表面的でない潜在的な自己が表現された結果ではないかと考える。さらに、他者の作品や、他の芸術療法への興味の拡大が挙げられたことは、筆者らの期待を上回るものであった。

課題Ⅱでは、他者から受け取った自己イメージに対して「他者からのイメージと自己イメージが全然違うことに驚いた」、「自分のある部分はわかってもらえたら嬉しいが二面性があるような気がして不安」、「密かに収めているはずの内面が他者から示され驚いた」、「他者からのイメージで違ったり嫌なものではなく嬉しかった」など、イメージの差異や一致に対する驚きや不安、喜びなど様々な《他者の自己イメージへの情意的反応》がみられた。このことから、自己イメージとの一致・不一致に関わらず、他者から自己のイメージを受け取ることは情意的な反応を強く喚起するインパクトのある体験であることが示唆された。また課題Ⅱのなかで記述数として一番多く挙げられていたものは、「(自分は)こんな風に見られているんだと参考になった」、「これが他者から見た私らしさなのだろうかと考えさせられた」などの感想があった《他者の自己イメージへの認知的反応》の中の下位カテゴリーである《他覚的な自己イメージ認知》であった。他者から自分への評価は対人関係の中で賞賛や叱責など言語表現でなされることが多いが、あまりに直接的であったり、逆に婉曲的な表現であったりする。しかし、イメージでのやり取りでは、イメージの定義の中にあつたように言語よりも求めているものを純粋に表現できると考え

られる。脳の機能から考えると、左脳は言語刺激に対し分析的、批判的な機能を有するが、イメージの授受においては、情報は左脳を経ることなく、感覚的に視覚イメージを処理する機能を有する右脳に直接印象づけられるため、学生の感受性が高まったと推測される。学生は他者から自分のイメージをもらうという経験を通して自分というものを改めて感覚的に捉えなおすことができたと考える。

一方、「自分自身で強く感じていなかったイメージをもらい、私の捉えられ方は人によって違うと感じた」など、＜関係性によるイメージの差異の認知＞を挙げたものもいた。

課題Ⅱの3つ目の上位カテゴリーである《他者とのイメージ授受についての感想》では、一部ではあるがイメージの受け渡しが表面的なものに終わってしまったと感じたものもいた。他者の内面について十分に知らないイメージも表面的になってしまうことが伺える。前出した＜関係性によるイメージの差異の認知＞での意見にもあつたように、やり取りする人との関係性がイメージの正確さを左右することが示唆された。

筆者らは、「自己理解・他者理解」を講義で説明する際、「ジョハリの窓」を用いている(図3)。人は、自分のことは自分が一番よく知っていると思っているが、自分が知っているのは「開かれた窓(open self)」と「隠された窓(hidden self)」の部分だけであり、「盲目の窓(blind self)」については、他者から教えてもらうことによってしか知ることにはできない。これら3つの部分を知らうとする努力によって、自分にも他人にもわからない無意識な「暗い窓(unknown self)」の部分はだんだん小さ

<input type="radio"/> 開かれた窓 open self 自分でもよくわかっている 他人もよくわかる	<input type="radio"/> 盲目の窓 blind self 他人にはよくわかるが 自分では気がつかない
<input type="radio"/> 隠された窓 hidden self 自分ではよくわかっているが 他人には隠している	<input type="radio"/> 暗い窓 unknown self 自分にも他人にもわからない (無意識の部分)

図3 ジョハリの窓

くなり、自分自身をより良く知ることができるようになる。このように、自分を知るということは、他者との人間関係の中においてであり、他者に教えてもらいながら、自分を知っていくのである。今回、「自己理解・他者理解」を学習のねらいとして掲げ、講義だけではなくコラージュ療法という演習を通して行ったことは、知識の伝授だけでなく学生の感性に訴える体験学習として有効であったと考える。

コラージュ療法を学生の演習として教育場面に用いた例は少なく、その教育効果や学習過程がいまだ確立されていないのが現状である。今回、コラージュ療法の学習過程が学生のレポートから一部明らかになったことは新しい教育的試みの基礎的資料として評価できることではないかと考える。

まとめ

今回のコラージュ演習で、講義のねらいとした「自己理解・他者理解」の中で自己をイメージとして表現することが自己認識のきっかけとなり、他者

とのイメージの授受が情意的反応を喚起し、行動や意識変容の促進や他者への興味関心の拡大などが達成できたのではないかと考える。また、学生が楽しみながら、コラージュ演習を通じて「自己理解・他者理解」について学べたことは意義があったと考える。しかし、今後の課題として、コラージュ療法を用いた演習を通して、さらに深い自己理解と、表面的だけでなく他者理解を促進していくために、この演習で得られた学習過程の図式を念頭に入れ演習の方法論の確立を図っていく必要がある。

文 献

- 1) 杉浦京子(1994)“コラージュ療法”, 川島書店, 東京
- 2) 佐藤仁美(2000)看護教育におけるコラージュ活用の試み-自己理解・他者理解・相互理解-. 日本心理臨床学会第19回大会研究発表集, 241.
- 3) Berelson, B.(1957)“内容分析”(稲葉三千男他訳), みすず書房, 東京, p.47-75

受付日 2002年1月9日